

月報 No.75

神戸山岳会

発行日 49.9.1

発行所

神戸市生田区中山手通1丁目
105の9 前田方

発行者 立岡佐智央

例・集会スケジュール

9/ 1	委員会、集会及び夏山合宿反省会	於・研修所	10:00	内藤2
9/ 8	大池集中	神電・箕谷	9:00	武田
9/15	不動岩 R.C.T	前夜・国鉄宝塚	20:00	釜本
16	百丈岩 R.C.T	当日・現地		三浦
9/22, 23	木曾駒ヶ岳・沢集中(詳細未定)			内藤2
9/29	コウモリ谷 R.C.T・技術委員会	当日・箕谷	9:00	岸本
10/ 6	強歩・菊水～宝塚	当日・平野	8:00	萩本
10/13	月見コンペ(油コブシ)	前夜・阪急六甲	19:00	南
10/20	保墨岩 R.C.T	前夜・阪急六甲	20:00	宮本
10/27	ボッカ 菊水～摩耶山(30～35kg)	当日・平野	8:30	植原
委員会	10/2 19:00	(いずれも研修所)		
集会	10/9 19:00			

会事務所移動にあたって

岸本委員長

長期にわたってお世話になっておりました前田氏宅も、都市計画のためこの9月に建て直すことになりました。来年早々に完成の予定だそうです。

長い間、自分達のホームルームのように気楽な気持ちで利用させていただき、また山岳会の会計、装備の管理と、いろいろ迷惑をかけてまいりました。会員一同感謝しております。本当にありがとうございました。

今後、若い人達で運営してまいりますが、要領のわからない未熟者ですので良きアドバイザーとして見守ってやっていただきたいと思います。ヒマラヤ遠征、家の建設と、いろいろ難問を抱えておられる前田氏であり、迷惑にならないよう出来るかぎり自分達の力で頑張ってもらいたい。

尚、無理なお願いかもしれませんが、完成の暁には、是非ともビルの屋上の片隅でもお貸し願えれば幸わいと会員一同の希望です。

どうぞよろしくお願ひします。

8月21日

神戸山岳会・仮事務所

(自9月1日)



岸本氏宅(昼間P.M 5:00まで)

TEL. 575-6237

野上(芳)氏宅(夜間)

TEL. 521-3474

会計武田

(臨時会計として20万円計上)

事務・伝達萩本

TEL. 861-5015

装備管理先宮本氏宅

灘区高羽町5丁目5 末広荘26号

TEL. 841-4880 (12:00~13:00)

勤務先 TEL. 801-6005

装備管理責任者 宮本、内藤(正)、植原、三浦(管理、購入)

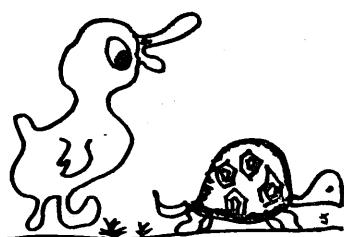
○ 新規購入予定装備

○ ユマール	1 set	8,000	(予価)
○ クロッガー	2 set	16,000	

49年度新役員

去る5月12日、登山研修所において開かれました49年度総会におきまして、下記の通り新役員が決りました。

委員長	岸本
副委員長	野上(芳)
運営委長	
企画	釜本, 内藤(保), 内藤(正), 立岡 三浦, 植原
装備	三浦, 植原
庶務	武田, 萩本
会計	武田, 萩本
月報	立岡, 三浦, 古賀
リーダー会	梅原, 武田, 釜本, 内藤(保) 内藤(正), 立岡
岳連委員	理事 岸本
	評議員 梅原, 武田
分科会委員	技術 内藤(正)
	遭対 釜本
	海外 土居
	山の集い 武田



例 会 報 告

5月19日（強歩・大月地獄谷一宝塚）

野上①②、宮本、古賀、三浦、田中（正）、河田

登山と云う行為にはいろいろな山行形式がある。縦走・岩登り・沢登り・冬山・スキー・氷壁など、人それぞれの受け止め方が違えば内容も違ってくる。しかし、自然が我々に与えてくれるすべての良さを受け止めることができ、眞に登山を理解し得るアルピニストであると思う。不安定な岩場でのピバークでさえ星や風が語りかけ、スキー山行では雪と身ごと話をすることができる。沢登りにおいてもまたしかりである。あの滝の落口から飛ぶように流れ落ちる水は、飛瀑をあげて登山者に語りかけてくる。

大月地獄谷も論外ではない。特に今日は気温が高く、シャワー・クライミングにはうってつけの日である。

冷涼とした水音を聞きながら沢すじをつめF1につく。ここでアンザイレンをし、F2では右岩左岩に別れて登攀、すっきりしたクライミングを楽しむ。真夏を思わせる天気の中、昼すぎ凌雲荘へ着く。ここからぶらぶらと一軒茶屋まで歩く。一つの山行には予期せぬ出来事に遭遇してやむを得ず予定を変更する必要にせまられる時がある。我々の場合もそうであった。目的の大月地獄谷は登ったので一軒茶屋より有馬に下ることに決定、魚屋道を下りながら色々と話題花が咲く。参加者全員満足しきった表情で下山。

5月26日（ボッカ・天狗岩南尾根）

三宅（信）、野上②、三浦、星野、藤原、田中（正）、幸内

天狗岩南尾根と云えば昨年の冬山トレーニングに行なった強歩で思い出されるのですが、この尾根は西山谷と大月地獄谷の間の尾根であるにもかかわらず、表六甲で最も静かな尾根の一つにあげることができるでしょう。

9時前に阪急御影を出発、9時半に南尾根の末端に着く。今日は新人のトレーニングが目的のため全員30kgを担ぎ、10時に歩き始める。この尾根を選んだのは、静かなこともあります、尾根自体が適度な間隔で登峰しているので初めてのボッカにはうってつけの尾根である。あの菊水や摩耶山のように極端な登りがないため、これからも利用されて良いと思います。30分に5分間隔で歩く、会う人は誰もなく、山菜取りにも忙しいくらいです。4ピッチで天狗岩に着き、ここで昼食をとる。凌雲荘をへて極楽茶屋に着く。ここで先ほどから待っておられた三宅さんが

参加。小川谷を下り、横谷をつめて峰に出る。新人4名は初めてのボッカにもかかわらずよく頑張ってくれたと思います。ここで石を捨てて走るよう~~IC~~番匠屋畠尾根を登り4時~~IC~~極楽茶屋~~IC~~着く。空模様が悪くなり雨が近い。ここよりゴルフ場をへて油コブシを下るが途中から雨も加わって5時30分阪急六甲~~IC~~着く、ここで全員解散。

6月2日 雪彦山R.C.T

植原、内藤(1)、内藤(2)、宮本、三浦、萩本、田中

前夜雪彦山麓集合、登山口の広場~~IC~~テント2張り、夜は例によつて例のごとく。

午前7時出発、3パーティ各々自由~~IC~~ルート選択。内藤(2)、宮本パーティ三峰右上バンドルート、不行一般ルート。三浦、古賀パーティ地蔵一般、地蔵正面ルート。萩本、田中、植原パーティ地蔵一般ルート。

午後から、内藤(2)、宮本パーティを除いてパーティ編成変更。三浦、田中パーティ地蔵一般ルート。古賀、萩本パーティ三峰右上バンドルート、途中より下降。

夏の気配を感じる熱い一日だった……。

(記:植原)

6月9日 (強歩) 菊水山—摩耶山—宝坪 20Kg

野上②、土居、三浦、星野、田中(正)

8時50分平野を出発、ひと汗かいて9時30分菊水山取付~~IC~~着く。ここで各自適当に石をつめて歩きはじめると、あまりの暑さ~~IC~~閉口してしまう。1ピッチで頂上~~IC~~着く、頂上では野上②さんが待つておられた。そのまま進み城が越の水場で1本立てる。11時、猛暑の中を鍋蓋山を目指して歩く。頂上をすぎたところで土居さんが参加、市ガ原をへて地蔵谷の堰堤で昼食をとる。梅雨入り前の暑さとでも言うのか、おそらく30度は越えていると思われる。1時半に出発して2ピッチで天狗道を歩き2時すぎ摩耶山~~IC~~つく。ここで大休止をしてケーブル駅より袖谷~~IC~~降りる。

20kgぐらいの荷を担いでの強歩であったが、暑さを加えればこのぐらいの距離で目的は達成されたものと思う。

この暑さは例会企画立案者も参加、経験すべきとの声もあったことを付記しておきます。

6月16日 コーモリ谷R.C.T

岸本、岡田(政)、内藤(正)、三浦、宮本、田中(正)、星野、野上③、河田

晴れの暑い一日だった。岳連技術委員会のプログラムの一つ「六甲の岩場」の実地調査を行う。三浦君も非常に上達しこれからが大変たのしみだ。新人の4名もこれを機会に技術向上をはげんで早く会のムードに慣れ、素晴らしい会員として頑張ってほしい。

コーモリ谷は、比較的人工ルートが多く初心者には余りふさわしく無いようだ。

全員が各ルートをこなせる。そんな大きな夢をもって岩登りの楽しさ、恐ろしさを識り、眞のアルピニズムに向って、自己との戦である山登りを実践していきたい。

岩に咲く可憐な花に／ 一人のアルピニストは／ 静かに目をやる

そこにあるものは／ 一人のアルピニストだけが／ 知っている

6月23日 (I.T.T 強歩)

岸本、三浦、宮本、藤原、田中

10時前、蓬萊峠に全員顔を会わせる。梅雨の中休みを思わせるような天気の日曜日、色とりどりの服装をした登山者が屏風岩周辺に集まってくる。もうここには山ヤの世界がなくなったような感じがします。我々K.A.Cのメンバーは、そんな中を静閑を求めて追立てられるように屏風岩からわずかばかり離れた人気のない所へ歩きつく。今日のトレーニングは新人のアイゼンテクニックである。全員アイゼンを着け、風化の激しい Sand rock を登降する。アイゼンにピッケルを加えての登降を繰返す。実際、雪と砂の違いからなかなか思いどおりの歩きができなかったようですが、新人もいっしょに練習をしてくれたと思います。また今日は岸本氏も参加して下さったので三年会員としてはとても得るところがあり助かりました。

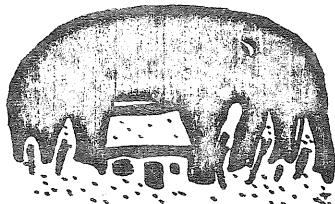
今日のトレーニングで感じたことは、みんな普段からの登山における初步的な知識がないように思われます。アイゼンの着け方や歩き方、ピッケルの持ち方使い方、それに加えて岩場でのザイルの結び方、使い方、登り方等をもっと普段から書物などで知っておく必要があると思います。我々はハイカーや観光登山者ではないのだから、自分のことは自分でしないと誰も手助けはしてくれないことを知っておいてもらいたいと思います。これがアルピニストの条件だと思います。

アイゼン・テクニックを終えて昼食後屏風岩を登り、いつのまにか雨になった中を大多田川をつめながらイチゴで腹いっぱいになって船坂に出る。ここよりバスで有馬に出、三ノ宮経由で全員解散。

7月14日 保墨岩 R.C.T

梅原、内藤（保）（正）、宮本、植原、穂本、星野、田中、幸内

雨が降るのにと言われながらも出かける。山での生活に馴れるため、雨の中でのテント設営。そのような苦しい事の多い山で、自づから入ろうとする新人諸君の期待している我が会のトレーニングである。困難と危険は自ら異なる、雨降り山行も、また楽しからずだ。技術的なトレーニングは出来ずとも、各メンバーの友好には、この様な日が一番よいと思った。（記：内藤正司）



妙見スキーツアー

3月3日、23時過ぎ、山陰線、八鹿駅のホームにて降りたった。華やかな服装をしたスキーヤーが5、6人はしゃぎながら降りた以外、ウィーク・エンドというのに、スキーもシーズン・オフのためか、他に下車した者はいない。シーズン中なら、夜中であろうと大勢のスキーヤーで混雑するであろうに、今では薄暗い待合室にて、灯の消えたストーブがあるだけで人の姿は全くなく深閑としている。

福知山線経由でやってくる会の連中を待つため、待合室内にあるシャッターの降りた売店の側にエアーマットを敷き、シュラフにもぐって仮眠することにする。

夜中の2時過ぎ、体が揺さぶられるのと共に“起きろ”という声に眼があく。シュラフから顔を出すと、釜本、立岡、宮本さんの3名がいた。

すぐTCタクシーに乗り込み、どこまで車が乗り入れができるかわからないが、とりあえず行ける所まで行ってもらうことにする。タクシーは、二条のヘッド・ライトに照らし出される寝静まつた街並のなかの狭い道路を猛スピードで走って行く。この辺りは道路上はもちろんのこと両側の家の庭や屋根にも全く雪が無く、ここ数日間の暖かさのため、山でも雪が少ないのでないかと心配させられた。しかし、椿色を過ぎた辺りから道路の両側に雪があらわれ、次第に増えていった。道路上は、除雪してあるためか、然程雪がなく、タクシーは奥へ奥へと進んでいく。

車の乗り入れ可能な最奥の地、日畠へ着いたのが3時。タクシー料金値上がりまだこの地方まで波及していなかったためか、深夜料金で1,230円だった。しかし、もうすぐ値上げをするらしい。今後、タクシーを利用する場合、その点を考慮すべきである。

空には、スマogで汚れた都会では、とても見ることができない無数の星が輝き、明日の好天を約束してくれている。

今宵の宿は、道路脇のガレージに決まる。風が吹き抜け、下のコンクリートが冷えて、なかなか寝付かれなかつたが、それでもいつの間にか寝込んでしまっていた。

翌朝、空が白みかけ始めた6時過ぎ、スキーにシールを付け、渓谷沿いの道路を進む。雪が溶ければ段々畠があらわれるとおもわれる斜面を過ぎ、針葉樹林の中に妙見部落が見えてくる。そこから部落に直接通じている尾根上にルートをとる。この尾根上には新鮮な朝の光があふれ、凧女雪に眩く反射する。視界を遮る物はなく、朝の陽光を但馬の山々はその大きな尾根にいっぱい吸い込み、生命の躍動感があふれている。眼下には雲海が拡がり、山上と下界を二分している。下界の汚濁は雲によって遮断され、山上までやってこない。清楚な白雪頂く山はまさに聖域だ。

8時、妙見部落に着いた。軒下まで雪に埋もれた数戸の家々には人気もなく、無人郷かとおもわれた。しかし、拳銃離村したとおもわれる一軒の家の中から、ハモンド・オルガンが地から湧き天に昇っていくかのように響いてくる。それは、あたかも生氣を失った部落への鎮魂曲のようだ。ここ数年、日本の山間僻地では急速に過疎化現象が起きているが、これが時代の趨勢といいうものか。部落のすぐ裏手に妙見名草神社があった。境内には樹齢推定1,500年、高さ50mの夫婦杉、もと出雲大社境内にあったという三重塔などがあり、それらを眺めながら朝食にする。訪れる人はなく雪に埋もれた境内は暗く、冷たく感じられるが、そのなかにも、春のような陽気のためか、どことなく長閑さを感じさせられる。

8時45分出発。本殿の裏手つまり北側にある尾根に取り付き、尾根上部で夏道らしき雪道を進めば、9時30分、妙見山と北村台の鞍部である妙見峠にでた。ここから西方の展望が急に開け、氷ノ山、鉢伏山、瀬川山などの兵庫県の山の盟主が望まれる。ここから眺める鉢伏山は、氷の山辺りから眺めた時の女性的ななだらかさではなく、天に突き上げたピラミダルな山容は、東尾根を長く延ばしている氷の山より高く、立派にみえる。これから向う妙見山はブッシュに被われたピークの陰に隠れ、その全貌をみることができない。

9時30分、妙見山を目指し出発。所々ブッシュがある単調な尾根で迷うこともなく。10時30分山頂に着いた。蘇武岳へ行くには時間が若干遅いので、山頂からの景観に酔いしれる余裕はなく、すぐ下山にかかる。立岡さんだけシールをはずし、他の3名はシールをつけたまま山頂からの急斜面を一気に滑り降りる。と、いうと、いかにもカッコよく滑っているようだが、実は、私以外の3名は別にして、私は滑っているか、転んでいるかわからない状態なのである。それでもこの斜面はブッシュが無かつただけに、たとえ止まらなくとも、どこに倒れても、障害物に激突

する心配がないので思い切って滑降に入れた。妙見山から妙見峠の間でまともな滑降ができるのはこの山頂直下の斜面ぐらいだ、後は小さな登り下りがある平坦な斜面である。とにかく下りは登りに要した半分の時間で妙見峠に着くことができた。

妙見峠より、今度は進路を北にとり、蘇武岳を目指す。蘇武岳までには、まだ北村台、東鉢伏の2つのピークがあり、不服のない行程だ。峠で長居していれば日が暮れてしまう、密柑を食べ、すぐ出発する。ブッシュのある幅広い尾根をゆくと、雪原状の北村台にてた。ここまででは困難、危険な箇所はないが、北村台からは四方に尾根が出ており、尾根の取り付きを間違わぬようにしなければならない。特にガスに巻かれた時などは要注意だ。ここから東鉢伏への尾根に取り付くには西方へ折れ、そして北方ヘルートをとらねばならない。うっかりしていると右手、つまり地図上で北方へ延びている尾根に迷い込み易い。

北村台から東鉢伏へはブッシュがなく、広大な斜面が拡がっている。シールを外し、緩斜面の箇所は、ボーゲンと呼ぶには気がひけるボーゲンをしながら、急斜面の箇所は例によって転滑降をしながら下っていった。東鉢伏の登りは、シールを付けず、開脚登行、斜登行で登り切る。

東鉢伏からの下りは急斜面だ、立岡、釜本、宮本さん達は斜滑降とキック・ターンによってスマーズに下へ行ってしまった。私はこの斜面の下まで真逆に滑り落ちてしまうのではないかといふ恐怖感が先走り、斜面にしゃがみつくようにして降りていく。それでも、思い切って滑ってみたが、その時、脚から“ボキッ”という大きな音がした。そして激痛がやってきた。脚を早く自由な位置にしなければと、脚を必至に動かそうとするが、一向に動かない。“骨が折れた”という想いが一瞬、脳裏を過ぎる。冷静になって、ソリに被った雪をのけ、脚もとをみてみると片方のソリがもう一方のソリを踏みつけていた。これでは脚が悪くなくても動かすことができるわけがない。しかし、痛みは去らない。おそらく捻挫だろう。こうなれば、やぶれかぶれ、どうにでもなれと豪快に滑り出した。そして数メートル滑った時、頭を雪中に埋める恰好で真逆に転倒。四苦八苦して雪中から出てみると、右足の先端部からソリが折れてしまっていた。しかたなく、輪環をはいて、下ることにする。最初から自信がなければ、輪環をはいていれば良かったのにと嘆いてみてもしかたがない……。

皆が待っている金山峠の手前の小さな雪原に着いたのが13時、そこで昼食にする。その後、不用になつたソリを、綿具の箇所だけ残し、他の部分は捨てていくことになつたがなかなか上手く綿具の箇所からソリを折ることができず、1時間近くそれに費やした。

金山峠に着いたのが15時、空にはいつしか一面雲が被つてゐた。時間が遅いし、私の脚の調子も悪いので、蘇武岳を諦め、ここより村岡町方面に下ることになる。

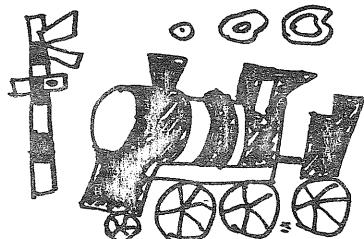
金山峠より、市原、日影へ延びている尾根はながらかなうえにブッシュがなくスキー滑降に最適。皆、鳥籠から放たれた鳥のように、自由に、伸々と、ルートを求め、シュプールを残し、快適に滑り降りていく。その後を私は折れたスキーを背に、痛む片脚を引きづりながら降りていく。やがて、遙か下方、右手と左手に林道がみえてきた。右手の林道（金山峠よりカカ山へ通じている夏道）の方が幅が広いので、そちらの林道に入るべく谷に近づいてみると、雪庇が張り出し、その下は数100mの崖になっていた。これではとても越えることができない。しかたなく左手の林道に入ることにする。小さな沢を越せば、段々畠らしき所に出、そこより道は通じていた。後はこの道を忠実に下れば良いのだ。辺りには夕暮れの景配が立ち込め、私達4名は凍てつく道路を下っていった。日影着17時

参加者：釜本（L）、立岡、宮本、植原

（記：植原）

春 山 合 宿

北鎌尾根—槍ヶ岳—赤岩岳—大天井岳—燕岳



今回の合宿は槍ヶ岳北鎌尾根を中心課題とした槍ヶ岳、表銀座縦走であった。北鎌尾根といえば東鎌尾根、西鎌尾根、北鎌尾根、それと穂高岳に続く大喰岳、中岳、南岳の尾根といった槍ヶ岳四尾根中最難な尾根として知られているが、ゴールデン・ウィークともなれば数十パーティに入る現在、岳界においては記録的に陳腐な対象になってしまっている。しかし、今回の合宿参加者四名中、そこにトレースを印した者はなく、ナイフリッジ、雪壁登攀不可避の尾根は、私達にとって未知であり憧憬の領域であった。

5月1日 曇 小雨 薄日

大町（6:00）—（タクシー）—葛温泉（6:30）—濁沢（8:40）—東沢（9:10）
—（湯俣温泉（11:55～12:30）—千天出合手前（14:00）

大町、葛間タクシー利用、料金1,580円。葛より奥はダム工事中のため一般車の進入が禁止されており、車が利用できるのは葛までである。それでも工事請負会社のトラックが東沢まで荷物を運んでくれるので助かる。葛、東沢間の道路は昭和36年6月30日発行の五万分の一地図とはかなり変わっており、林用軌道などではなく、道路の位置も変わっている模様。51年ダム完

成の時にはもっと変わるのでないかとおもわれる。

東沢汲所で荷物を受け取り昼食後湯俣へ向う。湯俣への道路は高瀬川の右岸につけられた平坦な道である。道巾は平均1m前後、上高地の徳沢、横尾間のような道路である。将来湯俣まで車が入れる道路ができるとか。湯俣まで予定より早く着くことができたので晴嵐荘前で休憩。

水俣川、湯俣川が合流する湯俣取入口より第一吊橋を渡り、水俣川左岸へ、この路は大変悪く、路というより踏跡といった感じである。また微妙なへつりもあった。地図によると一箇所高捲きがあるが、へつったのか、河原に降りたのか、それとも実際に高捲きしてしまっていたのか、それらしき箇所には気が付かなかった。

14時、10パーティ位テント設営している河原にてた。時間的に早かったので千天出合まで行くか否か議論したが、もし出合まで行き、テント設営場所が無ければ困るので、ここに設営することになる。二張並んで設営できるスペースがなく、別々に設営したが、それでも雪の上でないので居住性は良い。テント設営後、立岡、三浦北鎌取付きへ偵察に、古賀、植原夕食の準備。偵察隊によれば千天出合、取り付き双方とも設営場所があったとか。また、そこには数パーティ設営していたとか。明日の北鎌は混雑しそうである。痩せ尾根の北鎌で、テント場の有無が危ぶまれ、明日4時出発し、早いめに目的地へ着いてテント場を確保しようということになる。そのため無駄話もせず18時就寝。

5月2日 快晴

幕営地(4:00) - 千天出合(4:15) - P2(5:55) - P3(6:30) - 北鎌コル(10:10) - P8(11:25~12:25) - 独標(13:25) - 幕営地(14:00)

2時30分起床。テントから顔を出してみると空一面、星が輝いている。質素な朝食を済まし4時出発。吊テントは設営、徹収数分でき、時間、労力が節減でき便利である。雪渓をトラバースし、水俣川右岸のカチカチに凍った雪路をスリップせぬよう用心しながら千天出合へ、そこより天上沢の右岸に沿って第三吊橋へ、この吊橋を渡った地点が北鎌の取り付きである。

取り付きより側稜を登りつめP2へ、P2より稜線づたいにP3、P4へ、ここまでではさほど雪はなく、夏と変わらない模様。P2、P4の登りはかなりきつく、岩場が所々ある。しかし針金などがあり、岩登りの基礎をマスターしていれば、全く問題なく登れる。ただ、かなりなアルバイトを要求せられたが……。

P4より雪量が増え、P5のトラバースに入る地点でアイゼンを付ける。P5のトラバースは、千丈沢側を巻く路がついているのだが、凍った雪が薄くついており、アイゼンがまとわりに喰い込まず、スリリングなトラバースだった。

再び稜線づたいに北鎌コルへ、本日予定の行程はここまでだったが、時間はまだ10時過ぎである。空には雲一つない。この様な快晴に行動をやめるのは余りにももったいなすぎる。それで、雪を整地すれば至る所にテントが張れそうなので行けるところまで行くことになる。

大きなステップが続く雪壁、雪稜を進み、独標がまとめて眺められるP8へ、そこで水などを作り1時間程度憩後、急な雪稜を下降、あまり雪をつけてない小さなピークを千丈側に巻いて独標取り付きのコルへ。このコルより独標の頭まではダイレクトな雪壁である。しかし、ステップがあり、さほど困難さは感じなかった。独標からは槍の穂が間近に迫ってくる。独標を後にピークを1、2越えたコルの雪を整地し、テントを設営する。このコルは無雪期にはおそらくテント設営ができないのではないかとおもわれる。何故なら天・千丈沢側とも切れおちているから。設営後、今日一日の行動を振り返りながら、なかなか没せぬ夕陽をいつまでも眺めていた。辺りは静寂さに包まれ、全てを超越した雪の尾根に佇むのは4名の小さな私達だけだった。

5月3日 快晴

幕営地(6:10) - 北鎌平(7:25) - 槍山頂(8:40~9:15) - 肩(9:30)
- 中俣乗越(11:45) - ヒュッテ面岳(14:05) - 幕営地(15:00)

いくつかの小さなピークを越えて北鎌平へ。ここでザイルを出し、立岡-古賀、三浦-植原各々アンザイレンする。雪稜をコンテでつめると雪壁につきあたる。この雪壁をスタカットで1ピッチ。そこよりコンテで右斜上すると雪のテラスが現われ、右ヘコンテで10mトラバース、そこより岩稜を1ピッチのスタカットで頂上。正規のルートは東側から頂上にでるのだが、私達はその逆の西側から頂上にでた。

肩へ下降後東鎌へ、この尾根は結構瘦せておりテントを張れそうな箇所はほとんどなかった。赤岩岳手前の雪がない尾根上にテントを張る。ここからの眺望は良く、槍の北鎌がまとめて眺められ、2日間の復習になる。

5月4日 快晴

幕営地(6:05) - 赤岩岳(6:25) - 大天井小屋(8:10) - 大天井岳(9:05~9:20) - 為右衛門岩(10:00) - 蛙岩(11:45) - 燕山荘(12:20~12:30)
- 燕岳(12:45) - 燕山荘(13:05~13:25) - 合戦小屋(14:20) - 中房温泉(15:40)
夜中、隣のテントに起こされる。起きてみると吊テントの一方が強風に持ちあげられ今にも吹き飛ばされそうである。フライは風をまとめて受けヨットの帆のようだった。フライをはずし、シートの両端をおさえるような恰好で再び眠る。

夜明けとともに北西の風は夜中より幾らか弱まったが、それでも強い。表銀座は槍周辺と比べ

雪は少なかったが、大天井小屋まではアイゼンを付けて行った。大天井小屋より大天井岳への登りは雪はほとんどなく、久方ぶりのピラム底に脚は軽かった。

大天井より燕岳へは夏道をとばす。ここら辺りはアルプスの展望台である。北ア北部から槍へかけ、高瀬川を隔て、雪を頂いた山々が青く眺められる。

燕山荘よりグリセードをしたりしながら中房温泉へ、出発寸前の有明駅行バスに乗り込む。

パーティ：立岡（C.L）、三浦、古賀、植原

（記、植原）

三坂山・櫃ヶ山・星山 (中国山脈)

ゴールデン・ウイークの後半に、比較的近くで人の居ない所で、しかも温泉に泊り、のん気な山旅をしようという虫の良い計画を考えた結果、中国勝山周辺の三坂山を越え、足湯温泉に泊り、翌日櫃ヶ山から星山へ縦走して神庭の滝へ下ることにした。2日間快晴に恵まれ、呑気に歩ける積りが、結果的にはブッシュ漕ぎで、いささかへばってしまったが、誰にも会はず静かな山旅を楽しむことが出来た。

パーティ：片山英一、川本勉、新川利夫、三宅信道

5月5日 三宮 (9:19) - 久世 (12:51) - 山生 (13:05) - 足尾滝 (13:25)
- 稜線 (14:25) - 峠 (15:35) - 釘貫 (16:20) - 禾津 (16:45~17:31)
- 足湯温泉 (17:40)

久世から早速タクシーを飛ばし山生まで入る。この辺は製紙原料のミツマタの栽培が盛んである。現在造成中の林道が、ちょうど足尾滝の懸る神社迄延びていた。足尾滝は落差40m位で支谷にかかるので水量は少ない。そこより山道となり登るに従って怪しくなってくるが、僅かな踏跡をたどり稜線に出る。ずっと左の稜線に登ってしまったのに、之を図上の破線路の峠と思い違いした為に三坂山のピークを取り違え、十石茶屋跡、国名記念碑のあたりをうろついて三坂山の南の塚のようなピークを往復したりしてしまったが、磁石を出してみて、やっと軌道修正し、三坂山の岩峰の裾を捲いて図上の峠の切開きに辿りついた。昔は立派な道だったであろうが今は通る人も無く、茨やタラの木が多く、咲きこぼれる花を眺める所ではない。それでも旧往還の名残りを止めていて、道の格好だけは残っている程度である。峠から北への下りも同様で、大分下ってから、やっと道らしい道になる。湯原周辺の山波が夕陽を受けて美しい。首無地蔵を過ぎた頃に現れる釘貫の村落は平和そのものの静かなたたずまいを見せていく。禾津に着いたら、

丁度バスが出た後でタクシーも無く、湯原温泉へのマイカーがピュンピュン飛ばしているので足温泉迄歩く気もせず、次のバスを待つ間、早速酒が入り、バスが来る頃には丁度良い気分になってしまった。

足温泉は三軒の宿しか無く、ひなびた所で一日の山旅を終えて泊るには最適である。重い山靴を脱いで上ると早速娘さんが勝山の新茶を入れてくれ、その内に三宅（信）も合流し、温泉に入つて気分は上乗、それから例によってビール瓶と徳利が林立する事になった。

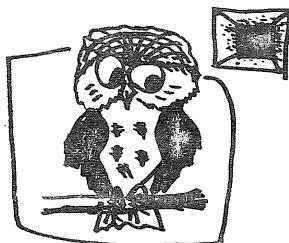
5月6日 足温泉（7：15）-樅ヶ山（9：10～9：15）-五輪山（10：20～10：25）-ジャンクションピーク（12：20～12：40）-星山部落（14：20）-神庭の滝（14：35～15：00）-津山（16：10～16：59）-岡山（18：40～19：00）

未だ酒の気の抜けない身体も朝の冷気に引き締り足温泉を出発する。湯原への街道を久納から山に入る。段々畠を外れてから、樅ヶ山の頂上を左にしながら、うんと腹を捲き、東北に派生した尾根に登る。牧柵があって古い牧場跡に沿って草山の鉄砲登りが続き、相当きつい。登るにつれて展望が広がり、中国の山波が一望の下に展開して素晴らしい。道は頂上附近の岩壁をさけるようにして廻り込んで頂上に導かれる。やはり大山がこの辺りの山としては一番光っている。南壁にはもう雪は無いが、東面には未だ残雪があり、鳥ヶ山から鏡ヶ成、蒜山の山容が美しい。昨日越えた三坂山や鋸歯仙の岩峰も朝の逆光ですがすがしく、足下には足温泉の家並がそれと分るようく小さく固っている。

誰もいない静かな山頂の気分を満喫しつつ、さて南の方、星山への尾根筋を見ると、相当長く途中にピークが三つ程あり、どうやら踏跡らしいものが見えるので、何とか縦走できるだろうと早速縦走に掛る。ところが、案に相違して一面の隅笠のラッセルである。それも短い所は何とか歩けるが丈の高い所となると大変である。段々と消耗して登りになると足も上らぬようになってくる。幸い、茨が少ないので、ツツツツ言ってへばりながらもラッセルを続け、あのピークを越せば何とか道があるだろうと淡い希望を持って五輪山を越し星ヶ山へのジャンクションピークに辿り付く迄に3時間も費してしまった。此処から眺める星山は草山のボリュウムの大きな山だが道らしいものは見当らず、頂上の三角点が白く光っているのが見えるだけである。朝からの笠漕ぎで、飽き飽きてしまって、登る気もしなくなり、星ヶ山と扇山の鞍部から下る事にする。鞍部には池の山と記した道標があり、星ヶ山と扇山への指向が記してあったが、あたりには道は見当らず、もう誰も登らない山になってしまったのであろう。雪解け時期には池塘となるような地形である。星山部落への谷をゴソゴソと相変わらずの笠漕ぎが続き、かなり下ってからやっと道に出会い、渴望した水にありついて、ホットさせられる。

明るい山村、星山を流れ抜けた溪流がしばらくすると急に断層を作って落差120mの神庭の滝となっている。落口から下を見ても相当な高さである。下から仰いでも、なかなか立派な滝だが、此処まで来ると観光地化されて人も多くなってくる。勝山から上ってくるとゲートがあって入場料を取られる事になるのだが、上から下りて来た為に、そのゲートを無料でパスしてしまった。タクシーを呼んで貰い、中国勝山を14時59分に出た列車に追いつくべく飛ばしたが、間に合わず到着津山迄行つて結局間に合わず、姫津線をあきらめ岡山経由超満員の新幹線で帰郷した。

(記:新川)



越後 御神楽岳 (1386.5 m)

(昭和49年8月2日～5日)

朝露IC濡れた林道を、ここち良い汗と冷気で導かれて御神楽岳に足を向ける。途中の鉱泉跡付近の遭難碑の前ではおのずと黙礼をしたくなる……。それほどまでに険悪なこの山を一目見たく、登りたく我々四人林道をつめる。越後の深い山にもかかわらず、岩場の取付付近には数パーティのアルピニストがベースキャンプを設けている。

遭難碑をすぎてから二ヶ所ほど顯著な沢を渡ると湯沢の出合につく。見あげると、湯沢の奥壁が想像を絶するほどのスケールで聳立っている。この湯沢の奥壁は御神楽岳の岩場において最もスケールが大きく、また困難な壁とされている。

『では、この御神楽岳周辺の岩場について私の知るところを書いてみたいと思います。

地理的には、新潟の南東50kmに位置するため関西からだと、入下山に一日かかる。文献や記録で知る限りでは、ああ、剣ヶ峰の岩場ぐらいかと思っていたが、見ると聞くとは大違い、山一つがピラミッド型の末端から頂上まで、端から端まで岩で構成されている。しかも見た感じでは岩は硬く、浮石はないほどつるつるのスラブで、ほとんどがフリクションを主体としたフェースクライミングで、リスもあまり期待することはできない。(記録によると、この岩場では普通のハーケンはあまり使せず、超薄刃の特殊ハーケンでないとはね返ってしまう。また埋込みボルトはシャンピング一本で穴二つまでということから岩の硬さを知ることができる。)そのため

もしスリップでもすれば、壁から取付、取付から雪渓へとすべり台のように落ちることはまちがいない。

このような岩場が中に四本のリッジを有し、四つのピークから成り立っており、スケールは壁だけで約400mくらいあり、ルートのとり方によっては700mくらいのクライミングにもなるだろう。また、ルートはほとんどがスラブ状ルンゼ、ないしはリッジ通しのルートが主体になると思われる。ただ雨が降れば逃げるのはむずかしく、まったくの快晴の日にかぎる。（もっとも岩登りは快晴の日に登るのが常であるが。）そして稜線上には水場は一ヶ所しかない。しかし岩場は東面のため明るく、上級のクライマーには楽しめる岩場だと思う。それに加えて周辺の沢はゴルジュ状で滝も多く、まだ開拓されていない沢も多くある。まさに理想の山と言えよう。

アプローチも車を利用すれば林道の最奥まで入ることができ、そこからベースキャンプを置くテント場までは1時間ぐらいで着く。

このように越後の深く険しい山も、近い将来“近くで良い山”になるだろう。それとともにK.A.Cも近い将来この山の集中登山を行なえば、充実した山行と高度の技術を得るとともに地域研究としての十分な成果をあげ得ることができるとと思う。また、御神楽岳の東面は開拓が進んでいるが、南に位置する本名御神楽岳の南西面を開拓することができる。この南西面にも300m～500mくらいの壁がありまさに未登の岩壁群と言えよう。』………

このようにアルプスのような混雑もなく静かな地域で、しかもアルプス的雰囲気の山を前に、少し遅い朝食を湯沢の出合いでとる。ここより高頭目指して急勾配のナイフエッジ状の稜線を行く。湯沢の頭を過ぎるころは水もなく、足は重たくなる。遮二無二歩いて、この稜線中唯一の水場雨乞峰において昼食をとる。ここより10分、御神楽岳の主峰に着く。ここで朝日岳や飯豊連峰を望見することが出来る。そして新潟と福島の県界にある本名御神楽岳に立ち、そのまま福島県側に降りる。御山清水というテント場をすぎ、熊打場、杉山ガ崎を過ぎて霧来沢に降り立ち、八乙女滝にてピマーク、たき火の炎に今日の興奮を癒す。

翌日、霧の中の林道を歩くこと2時間半、福島県本名駅に着く。

パーティ：新川利夫、片山英一、野上 博、三浦靖男

参考文献：岩と雪 20 山と渓谷 409

御神楽岳における情報や資料、写真などありますので、この方面について知りたい方は三浦まで連絡下さい。

（記：三浦）

会 員 動 静

数野 満義君 (結 婚)

去る5月1日 明石の岩屋神社で挙式されました。おめでとうございます。

奥さんも山の好きな方だそうです。

新居は次のとおり

〒240 横浜市保土谷区法泉町122 三河荘内

堀野 和子さん (住所表示変更)

〒657 神戸市灘区土山町3番10号

TEL. 811-8925

宮松 晓君 (移 転)

〒654 神戸市須磨区高倉台3丁目7番56号-502号

TEL. 734-6986

立岡 佐智央君 (移 転)

〒658 神戸市東灘区御影中町1丁目10-12



50, 冬山合宿参加者 (内定)

釜本・内藤②・三浦・宮本・植原・立岡
古賀・幸内・藤原・星野・田中・河田
萩本・南・川島(乾・金田)

月報原稿の提出要項

今夏の夏山合宿も無事終了し、もはや夏山の新鮮な感動を綴った原稿もそろそろ届いております。さて、原稿提出の要領は下記の通りですので、よろしくお願いします。

内 容 山行記録、紀行文、例会報告、雑感、隨筆、ポエム、会員相互の連絡
(慶弔・移転等) 山に關すること、その他何でも結構です。

用 紙 等

- 20×20 市販原稿用紙、楷書、横書きのこと。
- まちがいやすい固有名詞などはフリガナをつけること。
- ルート図・地図及びカットが必要な場合は $12cm \times 12cm$ スペース以内の白い紙に黒いペン又はボールペンでかくこと。

〆切期 日 截守

提 出 先 立岡 佐智央

〒658 神戸市東灘区御影中町1丁目10-12

三浦 靖男

〒662 西宮市大谷町8番3-506

TEL. 0798-36-3125

古賀 英年

〒657 神戸市灘区八幡町3丁目3-14

TEL. 821-4239

内藤 正司

〒657 神戸市灘区高徳町5丁目3-1

TEL. 851-1115

以上のいずれかの人へ直接手渡すか、郵送してください。